

<74歳 情動の一字書> (100502 朝日)

「御岳山を望む山あいのアトリエで、書の作品を書き続けている女性がいる。東京都青梅市の村木享子さん(74)。43歳で夫と死別し、自分を見つめ直して「一字書」の力強い作風をつくり上げた」

「足元には、畳より大きい特注の和紙が広がる。▽墨を含ませた長さ70^{センチ}の巨大な筆の重さは5^{キログラム}超。力を込めて持ち上げ、10秒ほどで一気にかき上げる。▽草書体の一文字で表す「一字書」。体を大きく上下動させ、腕を広げて躍動する姿は、舞踊のようにも、荘厳な音楽を奏でているようにも見える」

「書は生活自体から生まれる。情動と筆の動きが一つになり、それが文字になる。ならば人間として、より良く生きていこう。そう思い定めた」
「作品の評判は静かに広がり、94年夏、ドイツのブラウンシュバイク市にある芸術大学で個展を開いた。▽そこに突然、見知らぬ女性が訪ねてきた。ハンブルク美術工芸博物館の東洋部長、ウルズラ・リーネルトさん。…作品を初めて目にした日は「興奮して一晩眠れなかった」。▽99年夏には現地で書道のワークショップ(体験型講座)を開いた。…小柄な村木さんが、日本語と英語を交え、身ぶり手ぶりで指導する。▽1年だけのつもりが「来年もやってください」「今年はいつ来ますか?」と求められ、もう11回を数えた。▽人に教えることによって、自分も成長する。「共に学ぶ喜び」が、ドイツに通ううちにわかってきた。人間的な経験を重ねることは、一人で文字を書くのと同じくらい大事なこと。古木のような骨太な書の筆跡は、たくさんの出会いで練り上げられている、と感じている」

<訪ねて探る 大学の魅力> (100502 朝日)

「世の中には、実にいろんなマニアがいる。…「大学マニア」…。フリーライターの内太地さん(32)は、大学好きが高じて、大学取材を仕事にしてしまった。▽彼の「偉業」は全国の全大学を訪問したことだ。その数、773校(2009年10月時点)。学生時代から13年かかって達成した」

「…始まりは、学生時代に他校に行った時の驚きだという。母校には無いきれいなサークル棟、広大で緑豊かな敷地…。「違い」を見つけるのが楽しくなり、全国を渡り歩くことになる」

「「マスコミも高校も親も大学について受験と就職しか語らない」「大学自身も自分たちの魅力を知らない」。…確かに大学には「研究室が違えば別世界」という空気が今も強く残る。…マニアになる必要は無いが「大学探訪」はお勧めする」

<ストリート系の代表格 ネットロウ教授のファッション誌社会学> (100502 下野)

「今、20歳前後の女性に最も身近な「SEDA(セダ)」…。▽おしゃれ指南が男女どちらの目線でなされるかが、近年ファッション誌の指標となった。レイなど赤文字系・お姉系では異性指向の男子モテが支配的、ピーエスなどストリート系では同性指向の女子モテが優勢。セダでは双方が誌面混在するも…▽ただし、女子ウケ重視だから男子など眼中に無いだろうと決めつけるのは早計である。異性にあからさまなこびを売る服飾化粧の類を潔しとしないだけのこと。まずは同性からのリスペクトを得ることが大切ということなのだ」
「父親世代には決してまねできないが、今やおしゃれ感度の高い男子は女子の流行や着こなしを学び、自らに取り入れている。現代では「乙女パワー全開の甘口ガーリー」のみならず、「見た目男子のさわやかマニッシュ」も、男子にモテること間違いなしだ」

「セダとその読者層はどうやら、フェミニンとユニセックスとが交差するすこぶる有利な陣地を確保したようだ。ストリートスナップというGPS兼データベースでキレイやカワイイの位置を周到にマッピングしつつ、古着や重ね着という新兵器や新戦術を奔放に繰り出す。セダ戦士たちは、おしゃれ戦争における美しき覇者なのである」(栗田宣義・武蔵大教授)